

# 日光輪王寺蔵板絵著色神像の技法と彩色保存処置

## 受託研究報告第22号

中里寿克・立田三朗

### 1. はじめに

この板絵は十面あり、これらは図様の異なるもの三種がある。すなわち日光三所権現像，役行者八大童子像，勝道上人像である（図—1）。いずれも昭和34年重要文化財に指定されており，細目は次の通りである。

- |     |              |             |            |
|-----|--------------|-------------|------------|
| 1.  | 板絵著色日光三所権現像  | 被板付額装，正和二年銘 | 一面         |
| 2.  | 板絵著色日光三所権現像  | 額装 正和五年銘    | 一面*        |
| 3.  | 板絵著色日光三所権現像  | 被板付額装 正中二年銘 | 一面         |
| 4.  | 板絵著色日光三所権現像  | 被板付額装 嘉暦二年銘 | 一面         |
| 5.  | 板絵著色日光三所権現像  | 被板付額装 延文二年銘 | 一面（図—12）   |
| 6.  | 板絵著色日光三所権現像  | 額装          | 一面         |
| 7.  | 板絵著色役行者八大童子像 | 被板付額装 元徳三年銘 | 一面（図—13）** |
| 8.  | 板絵著色役行者八大童子像 | 額装          | 一面         |
| 9.  | 板絵著色勝道上人像    | 額装 文保二年銘    | 一面         |
| 10. | 板絵著色勝道上人像    | 額装 正中二年銘    | 一面         |



図—1 板絵全景

これはいずれも日光三山（男体山，女体山，太郎山）を廻峰修行した行者が宿房に掲げてその信仰の対象として日毎礼拝したものと云われる。正和2年（1313）より延文2年（1357）ま

\* 銘文中に「筆師暁運」とある。

\*\* 銘文中に「画師大法師滝□□」とある。

で14世紀前半に製作されたもので各詳細な施入銘があり当時の日光修験の繁栄の様を窺い知ることの出来る貴重な資料と云える。又絵画史の資料としても当代の板絵はあまり豊富とは云えないと云われ、制作年代の知り得る作例として注目すべきものであろう。

さて、上述の十面の板絵の彩色保存処置及額板腐朽部の強化処置が受託研究として適当と認められたので昭和42年度に実施した。これには岩崎友吉化学研究室長、樋口清治技官の協力を得、修理技術研究室茂木曙技官が剝落止めを行った。又顔料の分析を化学研究室江本義理技官、X線透視を物理研究室石川陸郎技官が担当し、それぞれの調査を行った。実測、記録、まとめは中里が担当した。

尚板絵の被板裏に貼られた色紙の保存処置については池上幸二郎氏をわずらわし、鉄錆釘の抜除とその修復については上田淑宏氏に負う所が多かった。

この受託研究については輪王寺鈴木常俊氏、足立広文氏の御協力を得、文化庁美術工芸課浜田隆技官、渡辺明義技官に多くの労をわずらわせた。

## 2. 板絵の形状

板絵の材はどれも杉板を用いたと思われる。表面は一部に滄鮑目が見られるが(正和2年三所権現像被板)大体は平滑でありカンナ仕上げをしている事も考えられる\*。

三所権現像六面の形状は二通りあり、額装とし被板を持つもの4面、額装とせず両端に端食みをつけた板状のもの2面が見られる。役行者像では前者の形状を1面づつ示している。又勝道上人像は文保2年銘のものは上端に端食みを作り下端は一文字に柄を出す<sup>はしげ</sup>が、これはおそらく合に差して立てたものと考えられる。正中2年銘のものは中央で縦に板を継ぎ、上端部の裏面に横棧を打った跡がある。下端は腐朽していて状態が明らかでない。現在継ぎ目で2つに割れている。

## 3. 板絵の構造

額板の構造は各板とも多少異なる(図-3)。

### (1) 三所権現像 正和二年銘

額板は上下の縁を厚板より削出し、左右端は厚目の端食みを取付けて縁と兼用している。この端食みを打った鉄釘は所謂「頭巻き」と云われる和釘である事がX線透視によって判明した(図-2)。被板は左右端に端食みを作る。

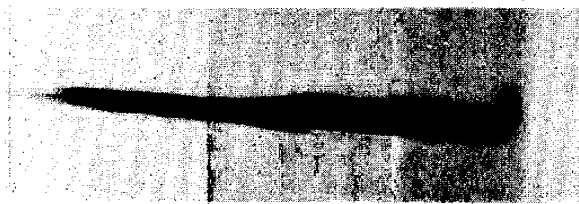


図-2 X線透視写真

### (2) 三所権現像 正和五年銘

両端に端食みを造る額板である。

### (3) 三所権現像 正和二年銘

額板は左右端に内面にかかるく面取りしたやや巾広い縁をはめ、下縁は作らず上縁は庇状に突出している。被板は巾狭の板をひぶくら

知ぎとし左右端に端食みを作る。

### (4) 三所権現像 嘉暦二年銘

額板の巾一ぱいに一文字柄を作り出し縦縁を取つけるが、縁は欠失している。上縁は内側の角を削って二段とし額板に釘打ちする。縦縁と上縁は直角に留めるが下縁は造らない。被板は

\* カンナの出現は明治前日本建築技術史(学士院編)の「工具」(241頁)の項によると室町中期頃より普及したとあり、カンナ仕上げではないかもしれない。

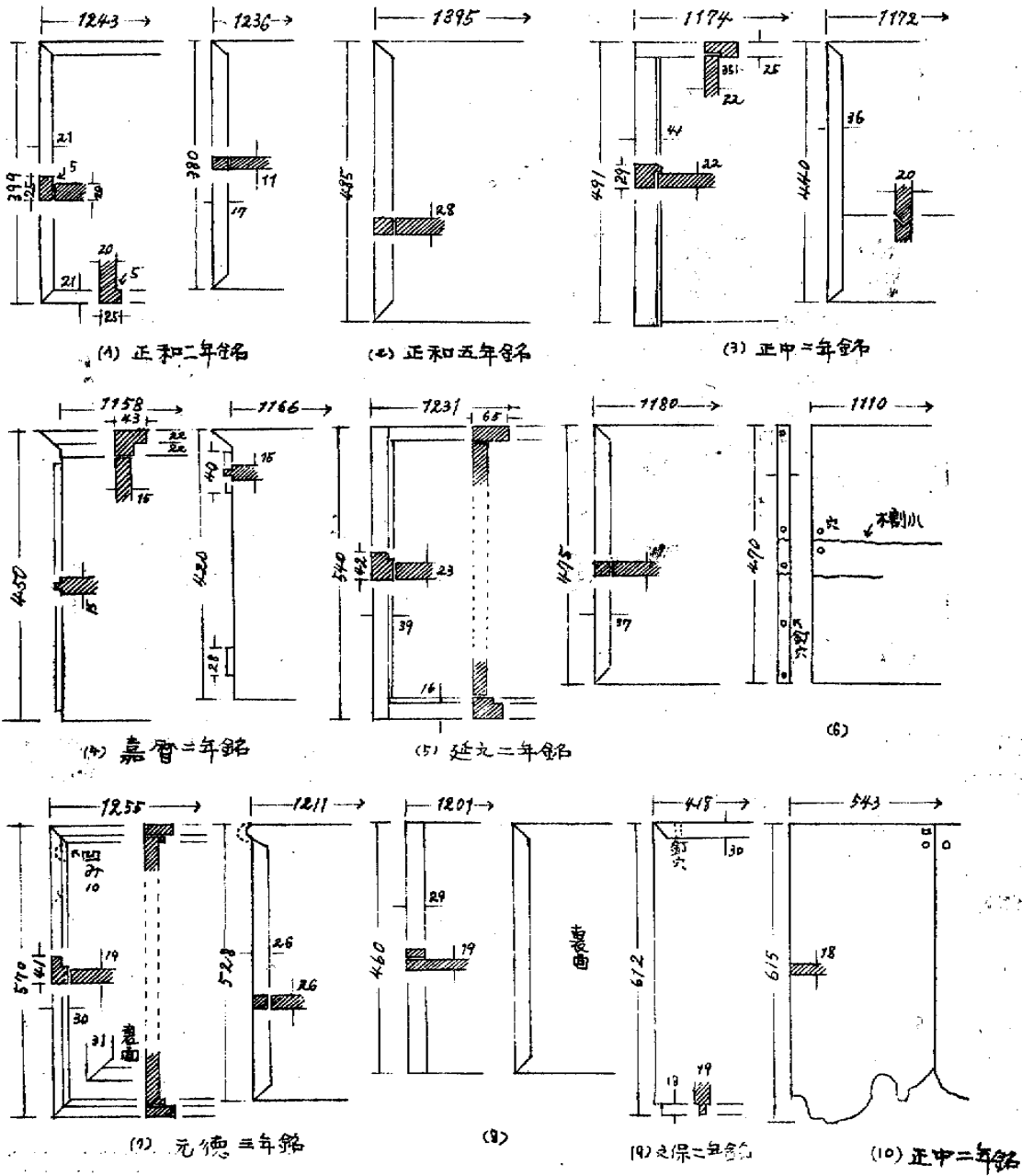


図-3 額板の構造

両端に枘を2本ずつ出すが端食みは欠失している。

(5) 三所権現像 延文二年銘

額板の左右縁と下縁は内側を削って二段とし、上縁は二段とせず板に打付ける(図-4)。被板は左右端を端食みとする。

(6) 三所権現像

額板のみであるが、両端の小口に釘穴が認められるので縁が欠失した事がわかる。

(7) 役行者八大童子像 元徳三年銘

額板は厚板を削って上下縁を作出し、外側に更に板を打つけ二重とする。左右縁は端食み状にはめ込み内側を削って二重縁とする。被板は左右に端食みを入れるが上端に突起枘を造り、額板の縁の穴に差込まれ開閉軸とする(図-5)。

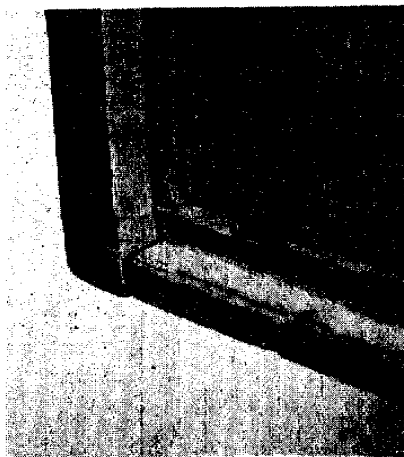


図-4 三所権現像(延文二年銘)  
額縁の構造



図-5 役行者像(元徳三年銘)  
額縁と被板の接合部

(8) 役行者八大童子像

額板の左右に縦一文字の縁を打つが、裏面では端食み状に切込まれている(図-6)。

(9) 勝道上人像 文保二年銘

額板は縦板で上端に端食みを作り、下端は一文字枘を作り台に差込まれたと考えられる。

(10) 勝道上人像

額板は縦に二つに割れている。上端には横棧を打った釘穴が認められるが棧は欠失している。

以上の如く板絵の構造は端食み、枘造り、縁造りに独特の細工を施しており、木工技法史の上からも興味ある遺品と云える。これらの板絵は吊り下げて礼拝するが、被板は直角に開いて肘金で留める。この為灯明の煙がこもって画面の上半が特に燻染しているのが惜まれる。

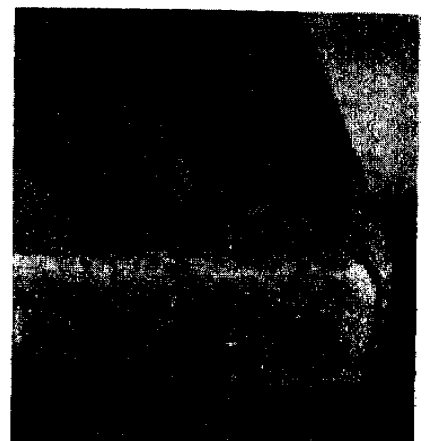


図-6 役行者像端食み構造

#### 4. 板絵の金具

板絵に付された金具は種類が豊富で数も多いのでここに一括して記した(図-7)。これらはすべて鉄製である。一つの板絵には多少形式は異なるが一般的に、接合用として肘金具と壺具が一組で一对、吊り下げ用の壺金が一対、被板には棹掛金を付け、これに合せて縁に壺金具を一つ打つ、計八个である。このうち肘金は額縁に打つものと被板に打つものがあり前者は、(1),

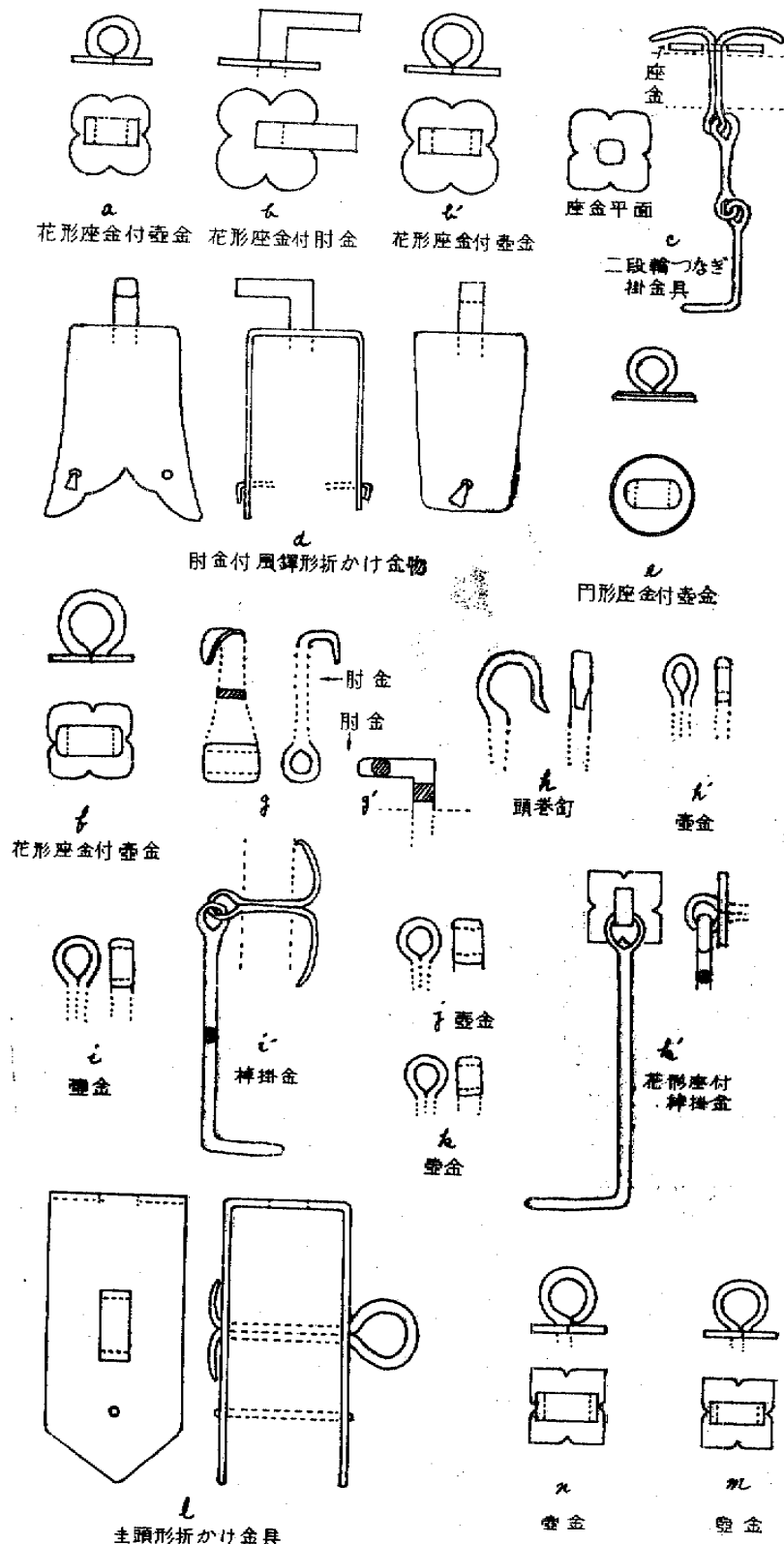


図-7 板絵の金具

(2), (5), 後者は(3)に見られる。肘金の狭み座金は(2)と(5)にあり, (2)は銅鐸形の入八双(図-8), (5)は圭頭形の出八双となる(図-9)。



図-8 三所権現像(2) (正和五年銘) 金具

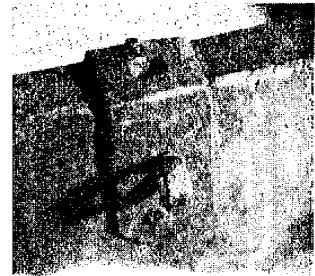


図-9 三所権現像(5) (延文二年銘) 金具

被板に棹掛金が実存するものは(1), (4) (図-10), (5)で取付けの跡を示すのは(3), (4), (7)である。(1)のものは中間と根元で輪つなぎとし, (5)は根元で輪つなぎとする。根壺はいつでも板を通して裏面で折曲げる。吊り下げ用の金具は壺金の他に肘金を用いたものがあり, (2)にそれが見られる(図-8)。これらの金具には座金を置くものも多く, 壺金では(1)に5個(図-11), (2)に2個, (5)に1個, (7)に2個ある。(2)の座金は丸形で他のものは四花形に切込みが入る。



図-10 三所権現像(4) (嘉暦二年銘) 金具



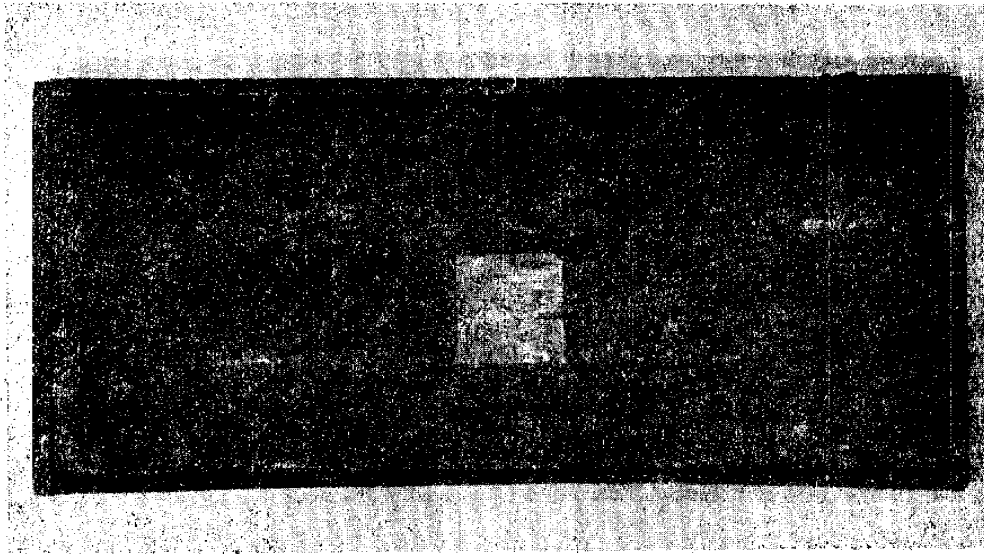
図11— 三所権現像(1) (正和二年銘) 金具

## 5. 彩色について

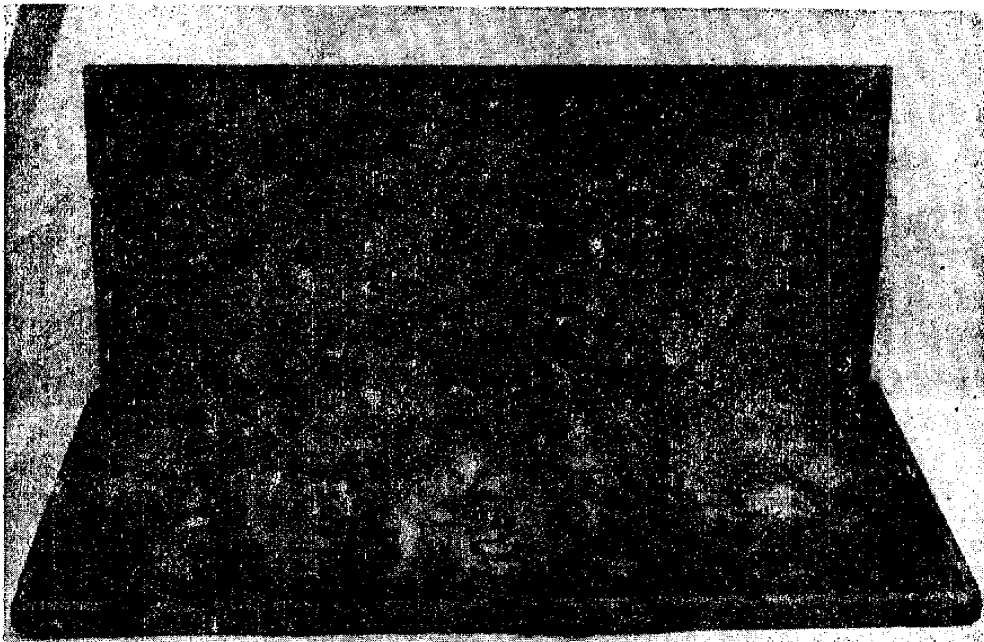
○日光三所権現像の構図は六面ともほぼ同一であるが細部の彩色等に若干の変化が認められる。彩色はいつでも下地がなく, 直接薄墨線によって下絵を描きその間を顔料で塗込めている。束帯のひだもほり塗りとし, 無文である。前記の如く画面の燻染がはなはだしく顔料や構図に明確さを欠く。

(1) 画面上半が特に燻染され, 背屏, 顔部は褐色に変色しているが胡粉と思われる。ただ背屏に引かれる朱線は変色が少ない。

全体に緑青が多く用いられ, 女神の宝冠飾, 団扇(図-14), 唐服の一部と上衣には浮線綾文を描き, 男神像の前垂, 背屏の縁花文を描く几床等に見られるがほとんど黒変している。又金泥にて宝冠, 団扇, 衣服のひだを描く。



図一12 三所権現像（延文二年銘）被板装着の状態



図一13 役行者八大童子像（元徳三年銘）被板見開きの状態



図-14 三所権現像（正和二年銘）  
女神像団扇



図-15 三所権現像（延文二年銘）  
男神像

(2) 女神の唐服と団扇は朱と緑青で下着は胡粉。肌は胡粉である。几床の座面は朱、脚は朱とし背屏は柱を緑青とし金泥、朱線でくくる。男神の束帯は墨で全体に金泥線で仕上げる。下衣は朱、顔、手、笏等は胡粉である。几床の座面には丹を塗り緑青による浮線綾文が僅かに見える。

(3) 全体の調子は前者とほぼ同じである。几床の隅金具、履金具には箔を貼るが貼り方が稚拙である。画面上半に燻染がひどい。

(4) 彩色は単調で朱と胡粉と墨が認められるが薄塗りで、白描風な感じのものである。ただ左右像の前垂、女神像の袖の吹返しなどに顔料の剥落の跡が見られる。

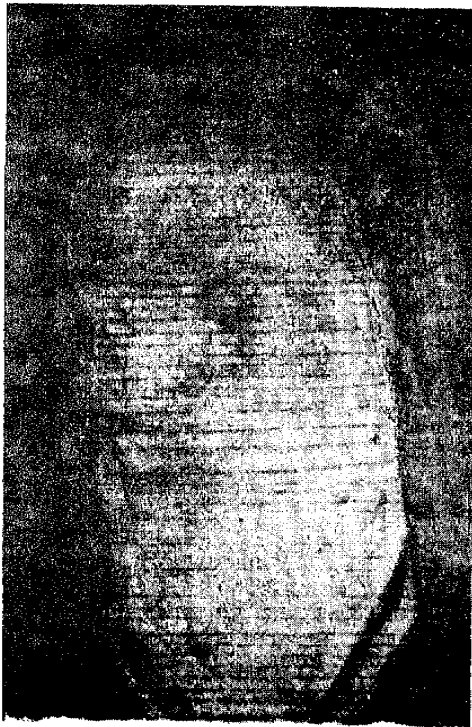
(5) 三神とも顔が童顔で、前者に比し特徴ある顔立ちとなり、画風も又幼稚さが目立つ、頬を丸く染めているのも他に見られない（図-15）。

女神像は唐服を朱と緑青で塗り、下衣と顔と手は胡粉である。冠は金箔を無雑さに貼り、上に墨で文様を入れる。団扇は緑青を塗つおし朱線でくくり、更にその上に金箔を線状におく。几床の座面は緑青地に朱線で唐草文を入れる。男神像は墨と胡粉で、ひだはほり塗りとし、下着は朱である。几床の座面には丹を塗り胡粉をもってし唐草文を書く。笏と劍は金箔、冠は胡粉下塗りとし墨を塗る。この被板にはほぼ中央に色紙（142ミリ×142ミリ）が貼られる。もとは全面に貼られていた痕跡が見られるが現存するのはこの一枚のみである。池上氏によると厚手の奉紙とされ、細かいキラを引き上に大津絵風の磯松と洲浜の様なものが見える。右すみに墨書があるがさだかでない。色紙が見られるのはこの板のみであるが当初のものかどうかには判断出来ない。

(6) 板が2つに割れ、絵は燻染により不鮮明である。とくに顔部の胡粉と女神像の唐服（色不明）がひどい。几床の隅金具に金箔が貼られる。

○役行者八大童子像の二面は画面構成はほぼ同じであるが画風や力量に若干の差が認められる。





図一16 役行者像(元徳二年銘)



図一17 同左 錫杖

(7) 役行者は頭巾を丹，顔，手，足は薄く丹を塗り上に胡粉を塗重ねる（図一16）。篋は素地上に朱の下絵が見え，その上に薄い茶色（丹？）を塗り墨で線描きとする。袈裟は丹の地に朱線で細かい文様を描き，条は墨地に緑青，細い金泥線でくくる。衣は胡粉で袖口，裾を巾広くとり墨地に緑青を塗る。いづれも金箔朱線でくくる。独鈷は墨地の上に金箔，錫杖は大雑端に箔をおいて墨線でくくる（図一17）。八大童子は墨で下描きし上半身を丹の具入りでほり塗り，下半身の衣は胡粉を塗り，墨地に緑青をもって巾広く縁どりする。肉色はほとんど剥落し木目が見えるほどに薄くなっているため粗い緑青は高く盛上って見える。鬼は肉色と緑青を一軀つつ塗る。背景の樹木や岩肌などには粗い緑青を無雑さに塗りつける。

(8) 役行者は頭巾を丹，篋も具入りの丹らしいが粒子が粗く厚く塗られる。顔や手足は胡粉地に丹（図一18），袈裟と衣は墨地の上に緑青で縁どりし上に胡粉で単純な唐草文を描く。独鈷と錫杖は金箔（図一19）。錫杖は一見雑な截金の感がある。

八大童子は一人が緑青を塗り，他は丹又は黄土色を塗る。衣は朱に緑青で巾広に縁どりする。独鈷，三鈷，柄香炉，三鈷劍等に金箔をおく。鬼は緑青肌の者と丹の上にべんがら色を塗る者という。目玉は金箔。背景の立木，岩などは緑青を粗く塗りつけている。

○勝道上人像は二面が画法を異にし，文保二年銘のものは胡粉下地が施こされる為，剥落がひどいが，正中2年銘のものは墨絵に近く図像はほぼ明確である。

(9) 全体に薄く胡粉が認められ下塗があった事がわかる。図像は頭部，数珠，衣の一部等が認められるのみでほとんど剥落している。残存部はいづれもやや黒づんで画面も荒びているがやや厚い層として認められ，数珠ではとくに輪廓が盛上る（図一20）。房には朱が，衣には緑青が認められる。背屏の柱には朱線で木目を画く。

(10) 素板の上に墨線で下絵が画かれ，賦彩は薄い。朱が唇と履の一部に，敷物，椅子の木目にも朱線を入れる。又袈裟金具，独鈷，水瓶，椅子の蔵手金具，履金具等に金箔を押す。いづれもその上に輪廓，文様を墨にて画く。



図-18 役行者像



図-19 同左 錫枕

図-20 勝道上人像（文保二年銘）  
数珠の部分

## 6. 彩色の剝落と素地の現状

○三所権現像六面の彩色の状態は、前記している様に下塗が行なわれず素地に直接塗られる為に剝落が比較的少なく、画面をはなはだしく損傷しているものは少ない。しかし胡粉や粒子の粗い緑青に若干の剝落が認められる。

(1) 全体に保存よく女神像の持つ団扇の緑青に若干の剝落が見られるのみ。

(2) 女神像及男神像（太郎）の顔部に剝落があり、後者は木目状に剝落している。男神像（男体）の几床座の丹にも一部欠損と汚染が見られる。

(3) 画面燻染がひどいが顔料に損傷なし。

(4) 女神像の袖のふき返しや男神像の前垂など、厚塗りしたと思われる部分に顔料の磨滅が見られる。男神像（太郎）の顔部に塗られる胡粉は表面剝離が生じ、この部分のみ胡粉が露出して白くなっている。

額板は左右の端食が欠損し、上縁のみが残存する。上縁から打たれた釘は表面に一部露出している。裏面には4本の細木を打ちつけ額板の散逸を防いでいるが後補と思われる。被板の端食も欠損する。額板、被板ともに下部に素地の腐朽損傷が見られる。

(5) 女神像の顔部に若干の剝落がある。又男神(太郎)の冠にも剝離が見られる。他はほぼ良好の状態にあるが、胡粉等に不快な汚染が見られる。

(6) 彩色層が薄いために剝落はほとんど認められないが燻染がひどく全面褐色になる。板は木目にそって2つに割れる。

○役行者八大童子像は二面とも彩色と画法が相似しており著しい差はない、役行者像に賦彩が多いためにここに剝落が集中している。山景や樹木に用いられる緑青は素地に直接塗られ、ザラザラとして盛上るが剝落はほとんど見うけられない(図-21)。



図-21 役行者八大童子像 八大童子の賦彩 下絵と緑青

(7) 役行者の顔部、手足、簀等胡粉の塗られる部分に剝落がひどい。とくに顔部の胡粉層はほとんど落ちて僅かに付着するのみで下絵が見えている。背景の緑青は墨く変色しているが剝離はない。金箔は独鈷に貼られるのが剝離がひどい。又童子像では上半身に塗られる肉色の顔料が、表面がやや荒びている。

(8) 木目にそった細い糸状の剝落が顔料に関係なく無差別に画面全体に見られ、やや特異な状態を示す(図-22)。中央像の顔料はこの剝落によりやや欠損が大きい。この様な剝落は(2)の男神像(太郎)の顔部に小部分見られるのみであるが、事例としては仙台市大崎八幡宮社殿板絵(櫨材)に顕著に見られた(図-23)。

○勝道上人像二面の彩色の状態は、両極端を示し、前者は下塗りが行なわれる為に剝落がひどく、後者は薄塗である為ほとんど剝落はない。

(9) 板が中央より2つに割れる。下縁には一部腐



図-22 役行者八大童子像 前鬼の彩色にみる横断文

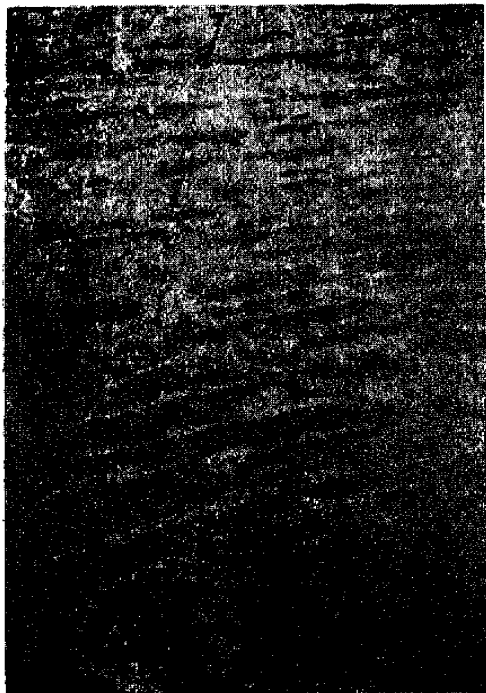


図-23 仙台大崎八幡宮拝殿板壁（樺）の横断文

朽が見られる。この板絵にのみ下塗りが見られるが、彩色の保存は十面のうち最も状態の悪いもので一部を除きほとんどが剥落している。現象として興味あるのはこの剥離に位置性が生じている事で、顔部や数珠部など画面の特定の部分が残存し、幸じてこの絵を価値づけている。

(10) 棧が欠損し板は2つに割れている。下部は著るしく腐朽し、虫穴も見られる。彩色は薄く剥落はない。

### 7. 殺虫処置

彩色の剥落止めに先立って、メチプロンによる燻蒸処置を2日間行った。

又更に虫穴の見られるむれの部分にはキシラモンの稀釈液を注入し、殺虫と防虫処置を終えた\*。

### 8. 彩色保存処置

前記している様に彩色は剥落が一応落着いていて現在危険というほどでなく一般的には安定した状態にある。しかし現に一部剥落が生じているしこれ以上の進展を防止する意味でも剥落止めを必要と考えられた。

顔料層は一般に薄いのでPVAの4%溶液を用い、部分変色を防ぐ意味で彩色部分以外の板面の部分にも塗布し、裏面の墨書の部分にも処置した。画面全体が燻染あるいは古色が濃い為、合成樹脂による「ぬれ色」はほとんど目立たず処置前と変りないほどであった。又(4)日光三所権現像に見られる板のムレの部分、(10)勝道上人像の下部に見られる腐朽部等は強化の為、濃度の薄いアクリル樹脂を充分浸透させた。尚後者の腐朽部は現状保存とし合成樹脂による復原を行わず、腐朽の型に削った板をただ当てるだけにとどめた\*\*。

### 9. 結語

これらの10面の板絵は、それぞれ描き継がれ描き改められて来たものであるのは前述の通りであり、したがって様式や画法にそれほど差は認められなかった。むしろ興味を引いた事は、板絵の木工技法と鉄金具の多彩多種にあった。これらについて多くの例を知らないが一括してこの様に変遷を知る得るのは貴重と云わねばならないだろう。

保存処置については、それほど困難と思われたものはなく、ほぼ計画どおり達成されたものと思われる。

尚、この板絵は昭和42年度の指定文化財修理報告書 美術工芸品篇（文化庁）に全面的写真が掲載されているので参照されたい。

付記 仙台市大崎八幡宮拝殿の彩色について

大崎八幡宮は桃山時代の建造物であるが、その拝殿の板壁は両側に四面づつ八面あり、いず

\* メチプロンによる殺虫処置は、当保存科学部アトリエにおいて、東洋燻蒸に依頼し行った。

\*\* この処置については上田淑宏氏によった。

れも厚い板目の樺板を横に四枚から五枚並べたものである。彩色の地塗りはまず胡粉を下塗りとしその上に黄土を全面に塗っている。これはおそらく金碧画に似せられたと思われる。図様は正面に近い二面にはぼたん唐獅子を、奥院に近い二面には岩に流水を表わしている。この彩色は黄土の上に胡粉を塗って下塗りとし、その上に獅子には群青、緑青、ぼたんには胡粉、朱を、岩、流れには緑青、藍を塗り墨で仕上げをする。これらの彩色に見る剝落状態は各面とも全面に及び、いずれも木目にそったものである所が留意される。すなわち木目の年輪上に細く線状に彩色層が残り、中間部分で剝落が生じている現象である。ただこの逆の現象すなわち年輪上で線状に剝離が生じている所も認められている。この為剝落が最も目立つ部分は板目の年輪の広い部分に生じている。この二つの相反する剝落現象は同一の板上で生じており、その発生原因は解し難いが興味ある現象と云わねばならない。ただ浮上り部分を精査すると板の縮みによって彩色書に歪が生じ年輪上で押上げられ折れ曲っており樺板の伸縮が無関係でない事がわかる。この現象は一般の針葉樹への彩色の場合はあまり現われないのだが、闊葉樹の彩色の特異な現象としてよいか速断は出来ない。

### Résumé

Toshikatsu NAKAZATO and Saburō TATSUTA :

Note on the Techniques of Tableaus with Polycolored Painting of Sacred Figures at the Rinnō-ji Temple, Nikkō, and Conservative Treatment on Them

This group of wood-panel paintings consist of ten panels altogether, namely six of Nikkō Sansho Gongen, two of En-no-Gyōja and Eight Attendant Youths, and tow of the priest Shōdō. Painted during the first half 14 th century, they bear detailed inscriptions decribing the circumstances relating to their donation to the Rinnō-ji. They, thus, are valuable sources of information about the state of Shugendō order Imthat thrived at Nikkō at the time, and are registered by the Japanese Government as portant Cultural Properties.

The panels are in three different shapes : those framed and protecteds with covers of hinged wooden boards, those flat and clamped with wood strips, and those with their lower ends supported by stands to result in the shape of standing screens. In wood-work techniques they are classifiable into two types : those in which the frames serve also as clamps, and those whose frames are carved out of the boards. It is interesting to note that as many as 14 different kinds of iron fittings are used on them.

The paintings are mostly done directly on the wooden base without any priming, the coloring being relatively thin. They therefore have not suffered much from ex-foliation of colors, but are badly tarnished, due mainly to smoke from light offered to the sacred images. The coloring is executed in carbon ink and Pigments (red lead, cinnabar, lime white, malachite, etc); gold ink and gold leaf are used effec-

tively here and there.

As conservative treatment on them,

(1) They were fumigated with methybrumide, and xylamon was infused into worm eaten holes.

(2) 4% solution of PVA was brushed on the entire surface to prevent exfoliation.

(3) The rotten parts of the wood base were reinforced with infusion of acrylic resin. Those parts which had rotten away were not supplemented with synthetic resin but were filled in with pieces of similar wood cut out in their shapes.